

毎年5月3日、琵琶湖のほとりを可愛いらしくも奇妙な行列が練り歩きます。米原市無形民俗文化財に指定されている天下の奇祭「鍋冠祭」です。行列は琵琶湖の北東岸、米原市朝妻筑摩にある筑摩神社に向かって、その御旅所から出発した一行です。

行列のメインを担うのは8人の女の子。7〜8歳の彼女らは、若草色の狩衣に緋色の袴を付け、雅やかに着飾っています。奇妙なのは彼女たちの頭上。なぜか張りぼての鍋を被っています。これが「奇祭」と呼ばれる所以です。その歴史は古く、少なくとも平安時代初期にまとめられた「伊勢物語」にも詠まれているように、千年以上の歴史をもつ伝統ある祭りということもできます。

彼女らが向かう筑摩神社周辺には、奈良時代に「筑摩御厨」という役所が存在してい

ました。この役所は、朝廷に琵琶湖の豊かな食材を調達する役割を担っていました。平安時代に編纂された「延喜式」という古い記録をみると、この役所では「醬鮒（ミソ漬けのフナ）」、「鮓鮒」、「味塩鮒」などを扱っていたようです。琵琶湖特産のフナを朝廷に貢納すべく、物資の集積・運搬の拠点になっていたことがうかがえます。周辺を発掘調査した際には、御厨に係する役所跡の発見が期待されましたが、残念ながら建物跡を見つけることはできませんでした。とはいえ、通常、役所のような公的機関から出土することの多い「墨書土器」と呼ばれる文字が書かれた器や、美しい緑色の釉がかかれた「緑釉陶器」などがたく

鍋冠祭



大正末期か昭和初期に写された鍋冠祭（鍋冠祭保存会提供）

を患うてくださる神を祀る社だということができま

（5500年前）で、早くから漁撈（魚介類などを捕ること）が盛んであったとくに、漆工芸を扱えるほど豊かな暮らしだったことも判明しています。このように歴史的にもても豊かな環境のもとで「筑摩御厨」が成立し、筑摩神社が誕生し、鍋冠祭という可愛らしいお祭りが今に残されたといえるでしょう。

さん見つかったっており、「筑摩御厨」が筑摩神社周辺にあったことは間違いないよう

をに入れて神社に運んでいたのではないかと指摘されています。

（5500年前）で、早くから漁撈（魚介類などを捕ること）が盛んであったとくに、漆工芸を扱えるほど豊かな暮らしだったことも判明しています。このように歴史的にもても豊かな環境のもとで「筑摩御厨」が成立し、筑摩神社が誕生し、鍋冠祭という可愛らしいお祭りが今に残されたといえるでしょう。

このような役所があったことと深く関連するのでしょうか、筑摩神社の祭神は「御食津神」——食物を司る神さまで

は、およそ9千年前の縄文時代早期から人々が暮らし始めていたことが知られています。また、出土している丸木舟や漆塗りの椀は日本最古級

（5500年前）で、早くから漁撈（魚介類などを捕ること）が盛んであったとくに、漆工芸を扱えるほど豊かな暮らしだったことも判明しています。このように歴史的にもても豊かな環境のもとで「筑摩御厨」が成立し、筑摩神社が誕生し、鍋冠祭という可愛らしいお祭りが今に残されたといえるでしょう。

女の子8人の頭上に鍋

彼女らが向かう筑摩神社周辺には、奈良時代に「筑摩御厨」という役所が存在してい

（5500年前）で、早くから漁撈（魚介類などを捕ること）が盛んであったとくに、漆工芸を扱えるほど豊かな暮らしだったことも判明しています。このように歴史的にもても豊かな環境のもとで「筑摩御厨」が成立し、筑摩神社が誕生し、鍋冠祭という可愛らしいお祭りが今に残されたといえるでしょう。

（財団法人滋賀県文化財保護協会 瀬口眞司）